

群青

東京都

文学が好きでたまらない母体

「群青」はもともと大塚雅春先生が創刊されたもので、大塚先生は若い頃は時代物や大衆小説を書いていたが、中年になって、シベリヤ抑留記や幼き日の思い出などをどうしても書いておきたくなって、同人誌を出すことにしたそうだ。

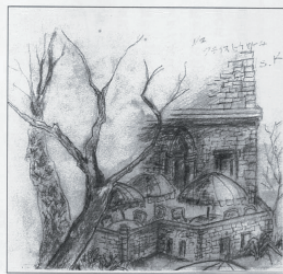
私は7号から参加したが、そのうち大塚先生が心臓を悪くされ、おまけに千葉のほうへ引越すことが決まり、25号から「群青」の編集と発行を頼まれた。

大塚先生が千葉に引越されてから、年に二回の合評会は千葉の先生宅で開かれることになった。先生は千葉までやって来る同人のため、お寿司を取りビールを用意してごちそうしてくれた。私たちが申し訳ないと言うと、「軍人恩給はばくのお小遣いに使つていいことになっているが、他に使うことがないので」とおっしゃっていた。

そして「群青」を隅から隅まで丁寧に読んでいて、早速批評がはじまる。そういうときは本当に生きいきとしていて、文学が好きでたまらないようだった。私も多くの人と会って

群青

第九十四号



平成三十一年四月十日

きたが、大塚先生ほど純粹に文学を愛していた人を他に見たことがない。私などは到底その境地になれないが、そういう人と出会えたということだけでも幸せだったと思う。

私が編集するようになってすぐ、河林満さんと小浜清志さんの二人が「群青」に入ってきた。二人とも立川に住み、親友で、それぞれ職場の機関誌に作品を発表していた。それを読んだだけで並々ならぬ才能は感じていたが、河林さんが持ってきた「黒い水」には感動した。死者を一旦土葬にし、何年か経って掘り返し骨を洗って埋葬し直す。幼き日に亡くなった母親の骨揚げの行事に立ち合う作者の母を恋うる気持ちが切ないまでに出ていた。

私はその作品を巻頭に載せることにしたが、作品を読ん



房総の浜辺を散策する同人たち

でない大塚先生は新しく入った人の作品を巻頭に置くことに懸念を感じ、同人誌での巻頭の作品の重要性を言ったが、「大丈夫です」と私にしては珍しく胸を張って答えたことを今でも覚えていいる。

小浜さんはそのときボクサーの話を書いてきた。その作品も悪くはなかったが、私はあえて「ボクサーのことなら、私だって調べればこれくらいのことには書けるわよ。どうして沖繩のことを書かないの？」とボツにした。

座談の名手と言われる小浜さんは沖繩の話で、いつも私たちを楽しませてくれていた。私はそれを書いてほしかったのだ。しかも沖繩と言っても多くの人が書いている戦場になった沖繩本土ではなく、遠く離れた八重山諸島の話である。

私の要望にこたえて書いた「赤いカラス」は名作で、次号の巻頭に載せた。これは文学界の同人雑誌評で大河内昭爾さんに絶賛された。

二人はそれぞれ「群青」に一作ずつ載せただけで、そのうち二人とも文学界新人賞を取り、卒業していった。私との交流が二人のために役だったことと言えば「高橋さんが取っているんだから、大したことはない。俺たちが本気になって書けばすぐとれる」と、新人賞に対して敷居の高さを感じなかったことではないかと思う。

それから「群青」が他の同人誌と違うところは、掲載料



大塚先生宅での合評会

を一切取らなかったことである。掲載料を取ると、つまらない作品でも載せないといけなくなるのが嫌だった。しかし今になって見ると、これがよかったのか悪かったのか、私にもわからない。

作品を載せるか載せないかの判断は、私の独断で決めさせてもらっていたが、いつもいい作品が集まるわけではない。ある程度の作品なら載せてくれるとなると、みんなある程度の作品で満足し、それしか書かなくなる。

自分の殻を破って一段と成長するためには、自分に対する厳しさが必要だし、身銭を切って掲載するとなると、いつも同じ調子では満足できなくなつて、もっと真剣に作品に向かい合い、いい結果につながつたのではないかと反省している。

「群青」は二〇一九年四月、94号で終刊した。書き手も読み手も高齢化し、続けられなくなったのである。私が編集し始めてからでも三十五年である。その間、休刊も遅刊も一度もなかったことは誇つてもいいだろう。

国会図書館には創刊号から94号まで全部揃っている。実際に借りだして自分の作品を確かめてきた同人もいる。とにかく一応全部揃っているということで「群青」に作品を寄せてくれた人にも、最低の責任は果たせたと思つている。

〔群青〕主宰／高橋光子